

日本人の心理の特色が 日本人のコミュニケーション型に どんな影響を与えるか

ジュリー・スミス

社会のコミュニケーションの型を観察して、それが理解できれば、どんな要因によってその社会が駆り立てられるかということも理解できるようになる。コミュニケーション型によって、社会について学ぼうとするなら、語彙とその用語の使い方を観察するとよい。しかし、そのみならず何も言わずに伝えるコミュニケーション（暗黙的なメッセージや非言語的コミュニケーション）も重要な要因であることを忘れてはいけない。Edward T. Hall (1977) の定義に従えば、日本の文化は高コンテクスト（暗にメッセージを伝えるところが多い文化）文化であり、日本の社会にそれに大きく規定されていると言える。

最近特に何が日本人を日本人らしく行動させるかと言う要因について書かれた本が多い。「日本人論」という類いの本である。その問題についてはいろいろな論があって、社会意識、階級社会、集団心理、和を望む、内と外、のような思想が含まれている。その理論の中ではこれが正しいとかそれが正しいと言わないが、すべての理論が日本人心理に寄与していると思う。

以上のことと他の日本の社会の特色を取り上げて、それらが日本人のコミュニケーション型にどんな影響を与えているか考えてみる。

日本人は、一般的に、他の社会より、非常に集団志向性の高い国民である。1868年の明治維新からの一連の改革でその前にあった階級制度が廃止されて、今ではその古い階級制度は見るかげもない。しかし、日本人は日常生活においては縦社会に生きている。これは日本人が自分より他人が「目上」とか「目下」とか「同等」であるとかいう「上下」のシステムの中で意志を通わせるということの意味する。

これは私の故国のニュージーランド、またはイギリス、アメリカなどの英語国民のすべての人は同等という理想と対比を成すように見えるが、日本の現状を見ると、自分が相手より良いとか悪いとかを信じる制度であるというよりはむしろ、他の文化より、尊敬を表すことを強調するシステムだというべきである。目上の人とは、一般に、年上の人、リーダー、教師、医師、何か社会のために奉仕した人などである。そういう人と相対する時に言語と行動を適切に調節する。後でその変化の例を見るが、一応、手短かに言えば、人はたいへん丁寧な行動をするようになる。このような目ざましい変化が珍しい英語国民にとって、そんな行動はこびへつらう行動のように見えるかもしれない。

Jared Taylor (1983) が日本人の若者が昇進のために縦制度のルールを守ると切り捨てる。日本人の若者から次の文を引用した：「やっぱり、言っていることをいつも本当に意味しないけど、そういう言い方をするのが社長の期待じゃないか。

(2)

言い方だけだ。実は意味がない。」本音から出た言葉ではないが、自分が相手より良いとか劣ったという縦(上下関係)思考は、一般に、本音と建て前の区別から出たものであろう。他方では、日本人の年配者から次のように引用している：「縦制度のもの言い方は人間が話すべきすがたを反映する。若者は年を取るとそれを分かって来るだろう。」これは日本のことわざを思い出させる：「稲は実るほど穂を垂れる」。これは「年を取ると謙遜を理解するようになる」を意味する。しかし、明白に、戦後日本に西洋文化が入って広がった。それと共に入った観念に、特に若者が感心した。これから倫理感が混乱し、世代間の違いがうまれた。しかし、彼らのコミュニケーション型はまだそんなに影響されていない。というのは、若者がまだ伝統的な倫理感を少し残しているからである、伝統的コミュニケーション型からほんの少し離れてきた訳である。

日本のコミュニケーション型の基礎は、「優劣」より、むしろ、「尊敬」であることが確かめられた。次にそのコミュニケーション型を考えてみよう。

最初に言語的な影響として、複雑な敬語の使い方を考えるべきである。尊敬語は自分が目上の人のことや物や様子などを言うときに使う言葉である。尊敬語の分野では、たいていの動詞には、同じ意味で全然形が違う動詞がある。または、次のように何の動詞でも、「一える・一られる」形を使って尊敬語にすることができる： 書く > 書ける 食べる > 食べられる

なお、次のような方式を当てはめれば、同じことができる：

読む > お読みになる

謙譲語は、自分のすることが目上の人にかかわることを言うとき使う言葉である。これは、尊敬語と同じように、特別の動詞の組が含まれている。丁寧語は敬語の多くに適用できる分野であって、「です・一ます」形を含めている。

ある名詞が「お」とか「ご」を接頭辞として付けて、もっと丁寧にすることができる。例えば、 お花、お金、お弁当、おはし、ご両親、ご病気、ご家族。

名詞が別の形になる丁寧な言葉がある。例えば、

家 > お宅、 人 > 方、 どこ > どちら

その上に、自分の家族を言うときと他人の家族を言うときに違う言葉を使う。例えば、

自分の家族	他人の家族
母(はは)	お母さん
父(ちち)	お父さん
兄(あに)	お兄さん
妹(いもうと)	妹さん

これらの丁寧語は主に尊敬語と共に使われる。

以下の表はいくつかの動詞が相手に応じて変えることができる例である。

辞書形 (家族・親しい友人)	です・ —ます	える・ られる	尊敬語	謙譲語	お..になる
くる 書く 食べる	来ます 書きます 食べます	来られる 書ける 食べられる	いらっしゃる — めしあがる	まいる — いただく	— お書きになる お食べになる

英語国民には、そのような定着した言語のルールがないが、日本人と同じように、「目上の人」と相対するときに必ず言語と行動を丁寧に調節している。(英語国民は「目上の人」というような明かな意識はないが。)これは注目するべきである。

非言語的コミュニケーションも上下人間関係に影響される。おじぎという行動は明白な例である。日本のおじぎはあいさつとして使って、握手と同等と考えられる。そういう考え方は間違いないが、おじぎのほうがもっと多くの場合に使えて、もっと多くのメッセージを伝えることができる。店の入り口のそばに並んでいる店員が一日の最初の客さんにおじぎをし、エレベーターを先に降りる人が頭を下げ、朝早くジョギングをする人が近所の人におじぎをし、給油所で店員が車と走らせて去る客さんにおじぎをする。

こういう場合に握手はふさわしくないことであろう。おじぎはあいさつしたり、感謝を表したり、わびを伴ったりするときに使える。もっと深く頭を下げるともっと深い感情とか尊敬が表される。二人が互いにおじぎをするのを見ると、その二人の人間関係の性質を理解できるようになる。一人が相手より深いおじぎをしていたら、その人が相手を目上の人と見なしていることが憶測できる。果てしなく互いにおじぎをし合っている二人を見ると、互いに尊敬を持っている二人であることが分かる。二人が互いに深く長いおじぎをしているのは、例えば、久しぶりに会った親しい友人の深い感情を表すのであるかもしれない。でも、現在の青年は過去よりおじぎをしなくなったので、(個人の観察より)この例の二人はたぶん年配者であろう。だが、上述の引用したことわざと同じように考え、若者が年を取ると伝統的な行動に帰る傾向があるかもしれない。これが真実ならば、伝統的習慣は輸入された西洋の習慣よりも、やはり、日本人を満足させる。

(4)

もう一つの大切な日本人の心理の特色は、日本社会でのすでに有名になった理論である「集団」の一員であるという自覚である。西洋社会では、個人の意志や決心の自由を持ち、自分の行動に責任を持つという理想を大切にす。もちろん、日本も、明治維新前の封建制度が消滅して、今では民主国家であるが、Florian Coulmas(1993)のいうように、「日本社会が封建制度からぬけ出したのは[自由]よりも、むしろ[平等]を重要視て来たからだろう」。日本の集団心理には、日本文化と他の文化との基本的な違いの要因の一つがその陰にある、というレッテルがはられっているが、私はそれがかえって、人間の基礎的な必要を満たす方の変化だと思う。日本人は、一人でそれらの必要を満たすよりも、集団にある相互依存状態や忠義から来る安心を好み、集団の援助を利用し、「集団」を強調してそれらの必要を満たす。「個人主義」の自由と個人的な成就を誇るのを放棄するように見える。

この集団忠義は家族という単位で始まり、それからこの「ウチ」の概念が、一緒にほとんどの時間を過ごす人に広がって、その人たちと含む。例えば、働く人にとって、家族以外のウチは、勤めている会社の職員を含む。実際に、この働く人が男性だったら、労働時間もそれ以外の社交活動の時間を両方とも考慮に入れたら、家族より、同僚の方がもっと一緒に時間を過ごすかもしれない。(労働時間以外の社交活動は、会社のためのように思われるので、それをするのは義務的な行動みたいである。)また、学生にとって、ウチとは一緒に勉強したり、スポーツをしたり、学校の正課外の活動をしたりする同級生のことで、全体の学校でさえも、ウチになる。

日本人は、人生がこのウチという集団に集中していて、ウチのメンバーの中の相互依存状態に甘えてしまう。土居健郎は、「甘えの構造」(1971)で、この依存状態、言い換えれば、「甘え」を理論づける。甘えというのは日本人が頼ったり、忠実であったりする人、すなわち、ウチのメンバーの慈悲に甘えることである。

甘えという理論は、ウチのメンバーが幾分直観的・感情的コミュニケーションを予期することも意味する。これは、相手にある思慮分別を持ってもらうことで、あることは言う必要がなく、予測べきであるということである。これのために、昔、少ししか話さない方がいいという文化的な理想が持たれたそうだが、現代にそれはそんなに強調されていない。

日本人は、ウチの中に、円滑な人間関係を維持するためにあらゆる努力をする。日本人にとって、自分の目標を実現して集団をうろたえさせるよりむしろ人間関係を混乱させないように行動するほうが良いと思われる。また、一般に、ウチのメンバーに自分がどう見られて、どんな意見が持たれているかということに大いに関心を持つ。

Ruth Benedict(1946)は日本社会を「恥社会」と呼んでいた。日本人の日常行動は「自分に恥辱を与えないように」の原則にのっとっている。また、日本では、

一般に、他の社会のように超自然的な神の力で個人の考えと行為が支配させるといふ宗教がない。それでは、ある社会道徳が個人の考えと行為を支配する役割を演じ、回りの人の行為を標準として、自分の行為を調節する。「AさんとBさんがするなら、私もしていいだろう」、「これをしたら、面目を失うなあ」のような問答で正当化する。この点を説明するものとして例を取り上げると、もし電車で二人の西洋人がいたら、彼らが二人組かまたは何人かのうちの二人かにかかわらず、一人の騒音のレベルは同じだろう。でもその二人が日本人だったら、二人組かまたは何人かのうちの二人かによって、一人の騒音のレベルが変わるかもしれない。集団のうちの二人だったら、二人組より、やかましいであろう。もちろん、個性によって違うが、観察してみると、集団の一員であるときに、日本人はともよりやかましくなるようである。彼らはその集団の一員であることから、自信が付いたように見える。

円滑な人間関係を維持したいという気持ちと顔を立てたいという気持ち両方がなぜ、よく見られる日本人の何か曖昧なコミュニケーションの傾向があるのかを説明する。英語国民の率直で適切なコミュニケーションをする傾向と対照的に、日本人は即時に決定するのはいやだし、ぶっきらぼうで率直に言った「いいえ」より、曖昧な答の方が優しいと思われる。ビジネスでの例を考えたら、日本人はどちらの側にも面目を失わないように互いに歩み寄って、どこかに妥協するのが望ましい。曖昧というのは、国際的には、誤解を招くところがあるし、英語国民が曖昧を優柔不断と間違えるところもあるが、実は、皆に満足させるように談判するつもりでの現れである。仕事で、集団アプローチが成功するには、この「和」が大切である。他のこういう和を維持するためのコミュニケーションの特色は、まず、直接対決を避けることである。(直接対決は人を心地悪くさせたり困らせたりする)。それから、否定的な感情を表さずに笑うこともある。これも異文化間に誤解を招く時が多い。お酒の席での無礼講のように社会的に受け入れられ、感情を抑制しなくていいような状況で、だれかがだれかをしかってしまってもだれも面目を失わない訳である。

私は日本にいる間に、感じたことだが、別に何でもないことについて会話をした時が多い。週一回会う友達に同じことを言われたり、同じ質問をされたりする。夏に人が何度も「あついですねえ」というのを聞いたりしたことは私にとっておかしくなるほど多かった。これらの例では、あまり役に立たない言葉を伝えてはいるが、言葉を伝えるという行為自体が二人の間に親しい気持ちを通わせていたということを表している。それは大変いいことである。

うちの中の間人間関係が大切にされているから、和があるということが広く信じられているが、他人との人間関係においては、衝突する意見がある。ある理論では、日本人がうちのメンバーを大事にすることが、ソトにいる他人に対しては、失礼になることがある。この理論によると、自分にとって、他人は大切ではなく、尽くす必要がないというのである。他方では、ある理論が、大勢の人が狭い国土に押し込まれる日本では、平和共存のために日本人が丁寧な態度をとると主張す

(6)

る。両方の理論はある程度正しいと思う。自分の観察によると、日本人は、一般に、他人を丁寧に取り扱う。丁寧でない場合には、通例、だれかウチのメンバーを大事にしながらか他人に失礼をしてしまっているケースがある。例えば、ある日、私は駅の切符売り場で待っていた時に、失礼な男の人にずうずうしく割り込まれた。彼は明かに「私より大切な人」の必要性に気を取られていた。

日本の人口の多さに関しては、確かに、許容度がある。ラッシュ時に電車が超満員になるとき、だれも駅員に押されたり、電車の中で右からも、左からも押されたり、荷物が引っ張られたりすることはかまわないそうである。

人口の多さゆえに、人から冷淡に見られたり、個性がないと感じられることもある。ニュージーランドでスーパーへ行くときに、カウンターで働いている人がほほえむか、少しでも話をしてくれないとおかしい。日本のスーパーでは、そんなことは期待していないので、「いらっしゃいませ」以外に、少し話をしてくれるのはもちろん、ほほえんでも、見られても、うれしいものである！（もちろん、日本でも、職種によっては客を大切にする：例えば銀行員、デパートの店員、ステューデス）。ニュージーランドのスーパーで元気な笑顔で客を対応するのは当然であるが、なぜ日本のスーパーでの働いている人のマナーが違うのであろうか。ニュージーランドの人口は日本の人口の約40分の1であって、人口密度も低いことにも原因があるのだろうか。そんなに高い人口密度の中で生きていたただでさえ「ウチ」と「ソト」を分ける日本人がますますその二つを区別し、その上、人口の少ないところよりも「ソト」の人口が多くなってしまいうからであらうか。とにかく、ニュージーランドが日本人よりも他人にフレンドリーなのは、西洋文化には「ウチ」と「ソト」のような心理がないからであらう。

今まで日本人のコミュニケーション型の観察された点を述べて、それからなぜそれらの点が存在するのかを説明する試みをして来たが、最後に要約してみる。

どの社会にも、その社会の構造と価値観がその社会のコミュニケーション型に大きな影響を与えている。日本社会も例外ではない。日本では、たぶん他の文化よりも、尊敬を表されるのがふさわしい人に尊敬を表すのを特に強調するが、それが日本の縦社会の特徴を作り上げている。この上下関係の特色はコミュニケーションの言葉の分野で最も影響を与え、相手によって、話し方を調節することになる。非言語的な分野での「おじぎ」も尊敬を表す方法である。

また、他の文化、特に西洋の国、に比べて、日本人は集団の一員であることを好み、人生の難題に直面した時、自分の目標を達する時にその集団のメンバーの手伝いや援助に甘える。（西洋人は手伝いや援助を感謝しなくて、利用しない訳ではないが、それでももう少し独立を好む。）

日本で歴史的にキリスト教のような超自然的な神の力で個人の考えと行為が支配されるという宗教がないということが、日本人が行為の標準としている集団を大事にする訳の一つであるかもしれない。

自分の集団（ウチ）の中に和を維持するのは大切であり、日本人は、一般に、特にウチのメンバーにとっては、たいへん丁寧な国民である訳である。感情を害

しないために具体的な話ぶりや決定を言うことを避けるほど丁寧である。こういう行為は、集団の望みに反しないで、面目を立てたいことでも影響されているであろう。

私は日本にいる間に、日本人のコミュニケーション型に対して様々な感じを受けた：無意味の会話に接したおかしさから、決定に非常に時間がかかるという事態に接してのいらいまで。今ではそういう風な行為の理由を理解するようになった。その理由で、日本人のコミュニケーション型は、他の社会のコミュニケーション型と同じように、その社会のメンバーのために機能する。

今後、日本人のコミュニケーション型はどの道をとるのだろうか。少し前に指摘したように、日本では、西洋流の「自我の確立」と日本の「集団」と、二つの倫理が共存している。この共存現象は特に将来の世代の倫理が「自我」の方に寄り、将来のコミュニケーション型に影響を与えるだろう。河合隼雄は「この狭い国土にこれだけ多数の人が住んで、各人が自我主張を行うとどうなることかとさえ思う」と言う(1976)。しかし、文化と同じように、コミュニケーション型も西洋化が進んでいる。現代の日本人のコミュニケーション型は相反する倫理が適当な所で、妥協している状態で決定され作用している。

参考文献

1. Argyle, Michael. Bodily Communication. Methuen & Co. Ltd. London 1975
2. Benedict, Ruth. The Chrysanthemum and the Sword. Houghton Mifflin Co. Boston 1946
3. Christopher, Robert C. The Japanese Mind. Charles E. Tuttle Co. Tokyo 1983
4. 土居健郎 1973 「「甘え」の構造」 Kodansha International, Tokyo
5. 河合隼雄 1976 「母性社会日本の病理」 中央公論者
6. Lebra, Takie Sugiyama. Japanese Patterns of Behaviour. The University Press of Hawaii. Honolulu 1976
7. 中根千枝 1970 「タテ社会の人間関係」 Tuttle. Tokyo

(8)

8. 中野道雄 昭和60 「ボディラングージ辞典」 大修館書店

9. Taylor, Jared. Shadows of the Rising Sun. Tuttle. Tokyo 1983

10. Yamazaki Masakazu. (Translated by Barbara Sugihara) Individualism and the Japanese. Japan Echo Inc. Tokyo 1994